

平成 21 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」共同利用の公募事業 報告書

研究課題： 文化記号論の基本的カテゴリーとしての〈境界・中心・周縁〉

申請者： Grecko Valerij（グレチュコ ヴァレリー）

本研究の課題は、文学の分野で越境や「中心」と「周縁」の交代といった現象がどのように行われているかを考察することだった。今回は「周縁」のひとつの例として、少数民族や移民の文学を取り上げ、「中心」にある国民文学とどのような関係にあるかを見ていくことに重点を置き、具体的には現代ヨーロッパのドイツ語圏（特にドイツとオーストリア）におけるロシア語作家の存在を取り上げた。

支給された研究費を使って二回にわたり北海道大学スラブ研究センターを訪問し（2009年9月23日～9月26日と2009年12月18日～12月21日）、付属図書館で資料収集を行うと同時に、望月哲男教授と意見交換を行った。また、12月に訪問した際には、GCOE-SRC 冬期シンポジウム「世界のボーダースタディーズとの邂逅」に参加した。このシンポジウムでは特に、中央ヨーロッパにおける国境地域の言語とアイデンティティの問題に関して、トーマシュ・カムセラ氏（ダブリン大学トリニティ・カレッジ）と意見交換できたことが非常に有益だった。

この研究の成果の一部は、2009年11月7日～11月8日に名古屋市立大学で開催された国際シンポジウム「アイデンティティ、移住、越境」（科研費 B「世界文学における混成的表現形式の研究」、研究代表者：土屋勝彦）において、「ドイツにおける新しいロシア移民の文化的諸相」というテーマで口頭発表した。この発表では、ポスト・ペレストロイカ期におけるドイツへのロシア移民の波について考察し、この移民たちの中から誕生したドイツ語作家たちがいわゆる「ドイツ文学」に刺激を与え、ポジティブな影響を与えていることを指摘した。また、このシンポジウムに招待されていた作家のひとりヴラディーミル・ヴェルトリープ氏（ソ連出身のロシア語母語話者で、現在はオーストリアに在住し、ドイツ語で作品を発表している）が、11月13日に東京大学大学院人文社会系研究科で特別講義を行った際には、司会を務めた。

今後もこのテーマに関して研究を続け、成果を発表したいと考えている。札幌滞在中に親切に対応してくださった先生方やスタッフのみなさまに感謝申し上げますとともに、このような研究の機会を与えてくださったスラブ研究センターに心から感謝いたします。